

# 算命学中庸

## 【初年】 5 2 回目

5 2 回目の授業はこのページからです。

授業科目           【十二大従星指数】  
                          【エネルギー論】

【初年】 5 2 回目 【十二大従星指数】 01

### □ 十二大従星指数（じゅうにだいじゅうせいりしすう）

【強星＝強い星】   【中星＝中位の星】   【弱星＝弱い星】 と  
いうように、十二大従星は3つの強さに分けていました。

具体的に、十二大従星各星の序列は決まっています。

1番強い星は【天将星】と習ったわけですが、2番目に強いのはこの星、3番目に強いのはこの星、4番目に強いのはこの星と……順番は全部決まっています。

『十二大従星表』

- ① 日干から年支を見て ..... 第三従星
- ② 日干から月支を見て ..... 第二従星
- ③ 日干から日支を見て ..... 第一従星



十二大従星表

癸	壬	辛	庚	己	戊	丁	丙	乙	甲	日干 星
巳	午	寅	卯	亥	子	亥	子	申	酉	天報星
辰	未	丑	辰	戌	丑	戌	丑	未	戌	天印星
卯	申	子	巳	酉	寅	酉	寅	午	亥	天貴星
寅	酉	亥	午	申	卯	申	卯	巳	子	天恍星
丑	戌	戌	未	未	辰	未	辰	辰	丑	天南星
子	亥	酉	申	午	巳	午	巳	卯	寅	天禄星
亥	子	申	酉	巳	午	巳	午	寅	卯	天将星
戌	丑	未	戌	辰	未	辰	未	丑	辰	天堂星
酉	寅	午	亥	卯	申	卯	申	子	巳	天胡星
申	卯	巳	子	寅	酉	寅	酉	亥	午	天極星
未	辰	辰	丑	丑	戌	丑	戌	戌	未	天庫星
午	巳	卯	寅	子	亥	子	亥	酉	申	天馳星

『十二大従星表』に記載されている『各星のエネルギー』

『天報星』	胎児の星	3 点
『天印星』	赤子の星	6 点
『天貴星』	児童の星	9 点
『天恍星』	少年の星	7 点
『天南星』	青年の星	10 点
『天禄星』	壮年の星	11 点
『天将星』	家長の星	12 点
『天堂星』	老人の星	8 点
『天胡星』	病人の星	4 点
『天極星』	死人の星	2 点
『天庫星』	入墓の星	5 点

エネルギー値は点数であらわします

参照 ⇒ 【初年】 40 回目 【十二大従星力学①】 21

これら 12 星の強弱を数字（点数）で表していますが、占いでつかっていくようになります。

十二大従星（12 個の従星）は、各星に備わるエネルギーの強弱を意味するでもあるのです。

そして、エネルギーの強弱を数字で表します。

十二大従星はエネルギーの強さを意味するものである



各星のエネルギーを **数字** で表示することができる

今までの『十二大従星』は身強・身弱とかで分けていたのですが、それぞれの星がもっているエネルギーの強さを数字で表した『十二大従星指数』をつかう技法が出てきます。

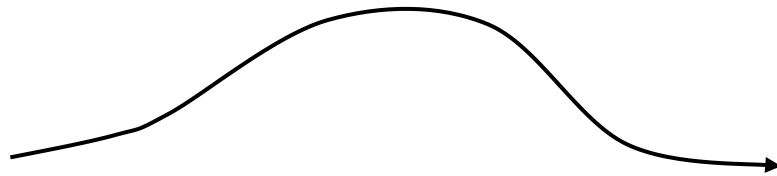
勉強がもっと先に進みますと、[たとえば] その人物の財運を計算して数字で表す。あるいは、一生の財運のすい推移を数字で表したりするようになります。

5 2 回目【十二大従星指数】の勉強は、その観方の基本だけをやりますけど、いずれは、十二大従星の点数をつかった応用の技法が出てきます。

⇒ 『十二大従星』に与えられた（1点～12点）の点数  
が決まった<sup>いきさつ</sup>経緯を説明していきます。

⇒ 『人生を一つの山』にたとえます。

このような姿です…… 宿命（1）人生



この山を〔生まれてから死ぬまで〕と考えます。

生まれてから……小学生・中学生・高校生とだんだん  
成長して、心身ともに強く逞しくなって、大人として  
一番チカラを発揮できる時代がやってきます。

そして、つぎには晩年期に向かって、少しずつ体力も  
衰えてきて、肉体は弱くなり、死への旅路を迎えます。

人生を一つの山にたとえて考えると、人間の人生だけ  
ではなくて、どのような物事にも、必ず、このような  
山ができあがるはずで

太陽も――朝、東から昇ってきたときは、陽の光りも弱々しく、だんだんとお昼に近づくに連れて、陽射しも強くなり、その頂点を過ぎると、西へ傾いて光りは弱くなり、沈んでいきます。

これは植物でも、最初の芽が出たときはちっちゃな、かわいらしい柔らかな草みみたいな状態です。

それが成長して少しずつ大きくなり、樹木であれば、大木になって<sup>そび</sup>聳え立ちます。それもピークを超えると、だんだんチカラが衰えて枯れていく、そういう時代がやってきます。

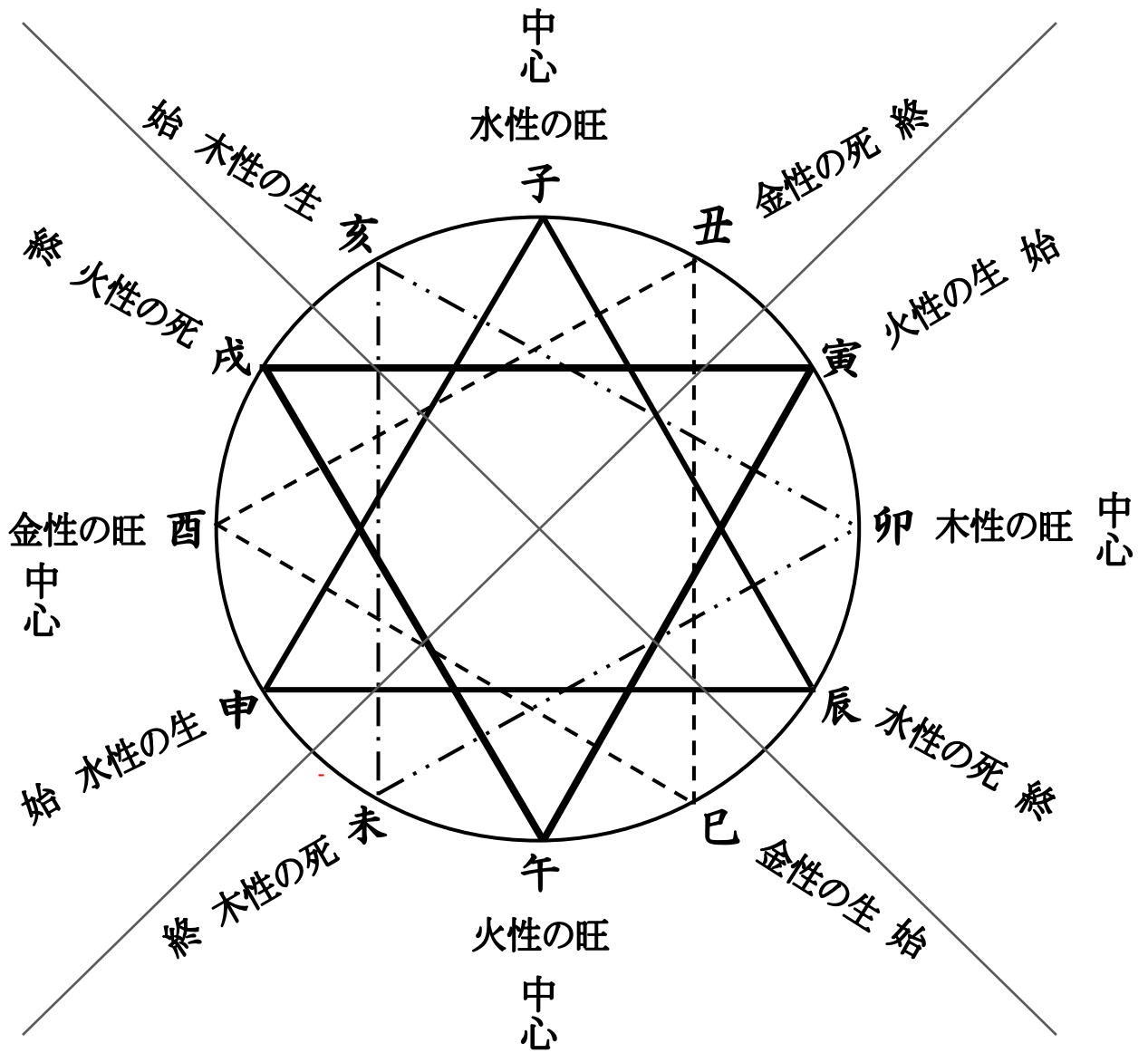
宿命 (1) 山 のように、人間の人生を山にたとえて考えたのです。

さらに……人間の一生には、三つの山があるとして、「<sup>せいおうし</sup>生旺死」と考えているわけです。

### 人生には三つの山がある

# 三合会局 と 『始 中心 終』

三合会局 (4) 始 中心 終



参照 ⇒ 【初年】 4 8 回目 【地時空間】 21

ばんしょう せいおうし  
万象は「生旺死」で成り立っています。

あらゆる物事は「はじめ・中心・終わり」で成り立っているのです。

万象万物には、始まりと、中心と、終わりがあって、この3つはそれぞれ連動しあって、つながりをもっているという考え方ですよ。

さらに……その《3》『十二大従星表』をつかう

ということで、三合会局の組み合わせは、十二大従星に直すことができるのです。

48 回目【地時空間】 32 頁 で勉強しています。

始まりのグループの頂点は【天貴星】 始まりの頂点

中心のグループの頂点は【天将星】 中心の頂点

終わりのグループの頂点は【天庫星】 終わりの頂点

十二支盤で正三角形を書くと、必ずそれは三合会局の組み合わせになるわけです。

それを星に直すと、天貴・天将・天庫 になります。

人間の意識が始まる星、物心がつく星は【天貴星】

この世の頂点である【天将星】

魂があので世に成仏する【天庫星】

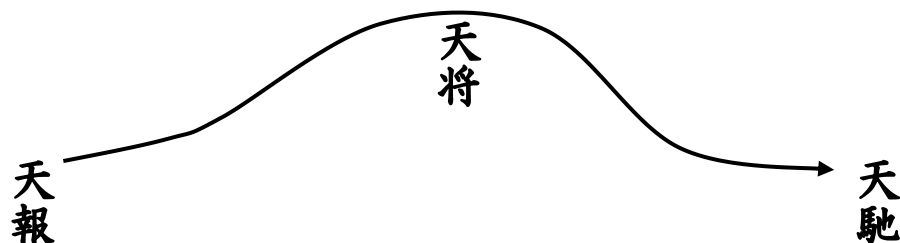


意識の始まり、意識の中心、意識の終わり、このように考えることもできるわけです。

人生を一つの山にたとえまして、さらに「生 旺 死」の三つの山、そして3つのグループに分けられます。始めのグループ、中心のグループ、終わりのグループ、この2つの考え方を組み合わせて、十二大従星の点数が決まったのです。

おおざっぱ  
大雑把に『人生は一つの大きな山』といたしました。

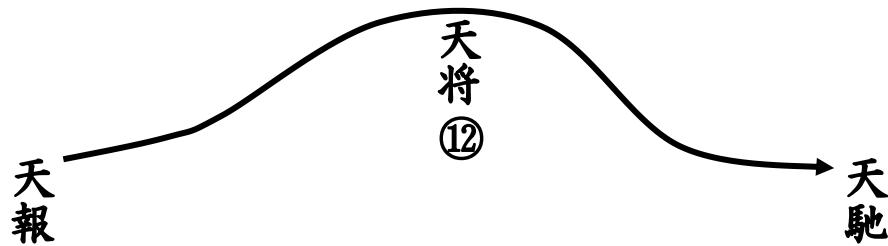
宿命（2）人生



人生の始まりは、胎児の『天報星』から始まって、赤ん坊・児童・少年と成長していくにしたがって、だんだん強くなり、天将星がこの世の頂点、人生で一番チカラを発揮できると思われる時代が『天将星』で、天将星を過ぎると、老人の星とか、病人の星になり、だんだん衰えて、最後はあの世へ行き着いて人生が終わります。

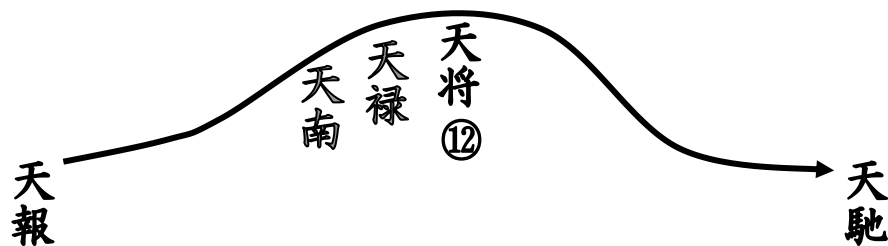
1 番強い星が『天将星』で、十二大従星は 12 個ありますから、天将星の点数を⑫点と決めたのです。

宿命（3）人生



強い星⑫点から、順番に弱くなるに従って、①点までの点数が決められました。

宿命（4）人生



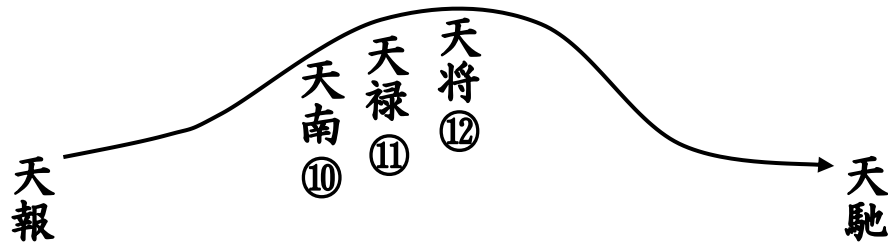
いままで学んだなかで……、

『天南星=青年』 『天禄星=壮年』 『天将星=家長』

これら 3 つは大人の時代の星として、チカラを発揮できます。特にエネルギーが強い星です。

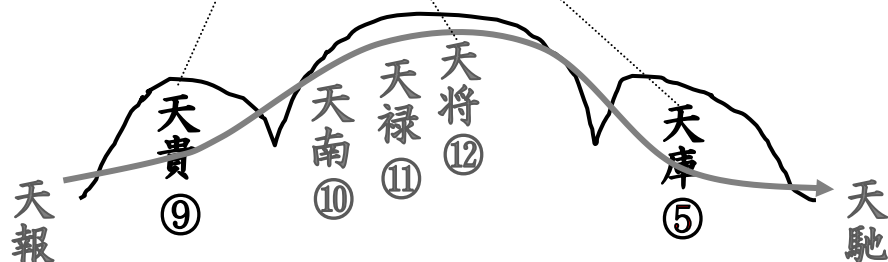
【天南星⑩点】 【天禄星⑪点】 【天将星⑫点】 これら3星は、頂点に行くに従って、少しずつ強くなりますから、下記の順番で点数が決められました。

宿命（5）人生



上図に加えて、人生には始まりのグループ、中心のグループ、終りのグループ、これら3つの山があって、それぞれの頂点が、天貴・天将・天庫という三合会局の考え方を組み合わせます。「生 旺 死」という3つが重なります。

宿命（6）人生



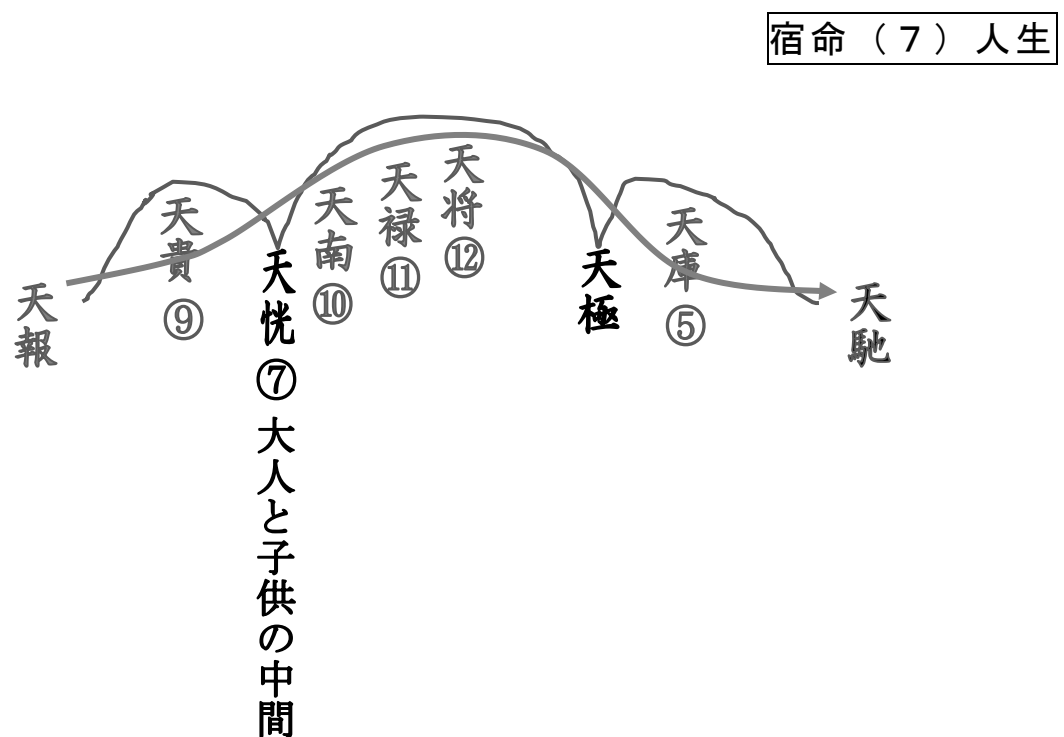
最初の始まりのグループの頂点は【天貴星⑨点】

真中のグループの頂点は【天将星⑫点】

最後のグループの頂点は【天庫星⑤点】

人生には3つの山があると言っていますから、3つの山があるということは、山と山の間には、谷になっている所があります。谷になる場所が2つできます。谷になる所は、前後の星より点数が、低くならないといけません。そうしますと……  
順番で、天貴星と天南星の間の谷は【天恍星⑦点・少年】です。

中心のグループと終りのグループの間の谷は【天極星②点・死人】



普通に考えますと〔胎児から始まり、赤ん坊・児童・少年・青年〕と、一直線に強くなって行くようにも思えますが、ここに一つ谷が必要になります。丁度その谷に当たるのは、天恍星の少年で思春期なのですが、その天恍星

は大人と子供の間期の星です。

中学生・高校生くらいの年代、大人でもない、子供でもない、大人と子供の間期です。

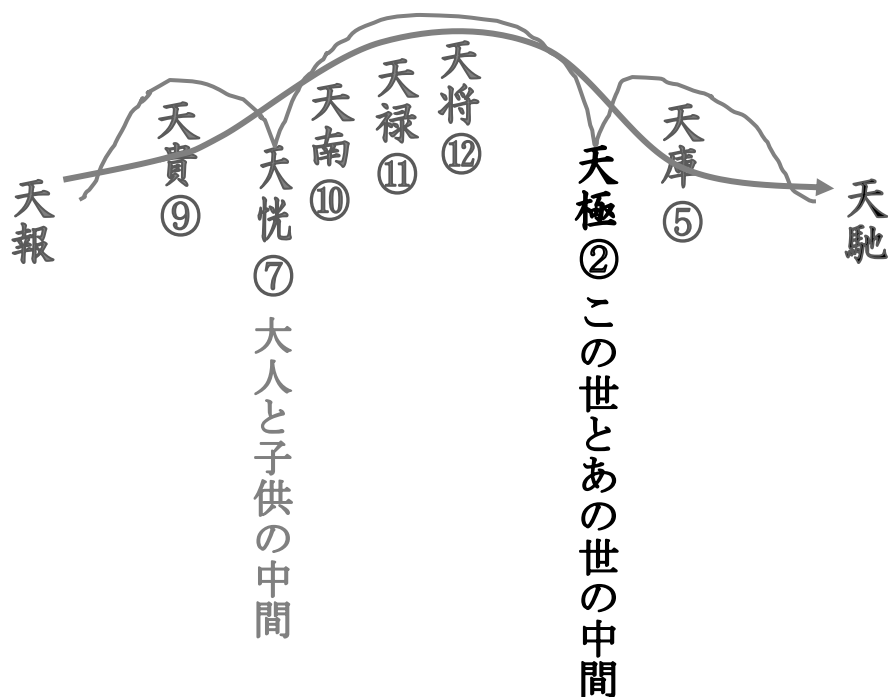
間期ということに不安定な時代です。

それゆえに、その前の星よりも、その後の星よりも、一段低い点数に決まったのです。

---

天恍星とおなじように、【天極星】も谷になるのですが、天極星は〔此の世と彼の世の間期〕の時代です。

宿命（8）人生



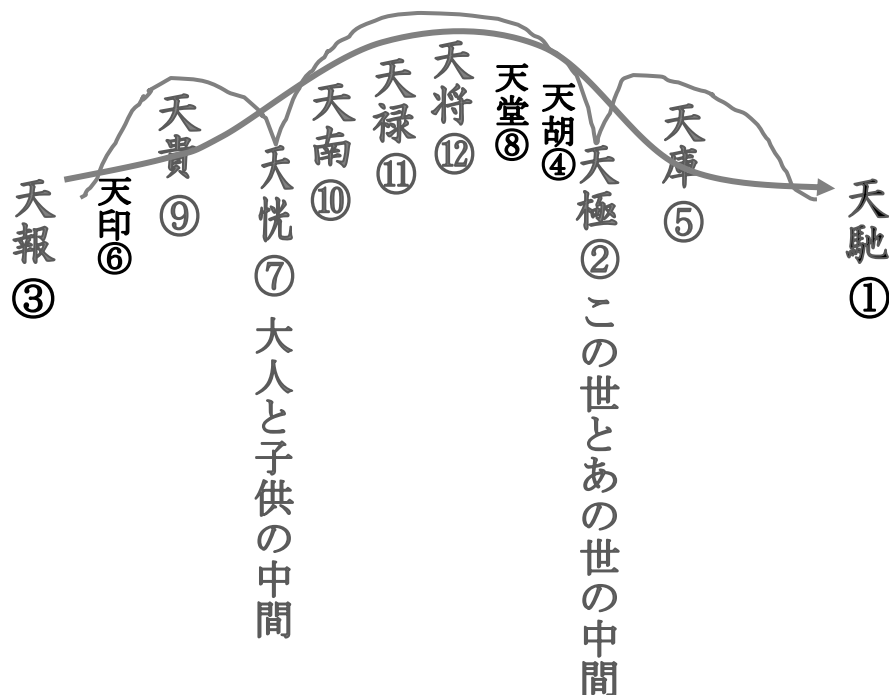
天極星は死人の星なので、〔此の世と彼の世の間〕を魂が彷徨っているわけですから、すごく不安定な時代です。〔精神も不安定〕という意味がありました。

それゆえに、前後の星よりも低い谷になるような点数に決められたのです。

「三合会局」と、天恍星と天極星の2つの谷が決まれば、後はズーッと上がって、ズーッと下がるという、法則に従って、星を当て嵌めていけば、大体の順番が決まってしまうわけです。

【天印星⑥】 【天堂星⑧】 【天胡星④】 【天報星③】 【天馳星①】

宿命（9）人生



一直線に強くなり、一直線に弱くなるのではなくて、3つの山があるとして、その山の頂点を、天貴・天将・天庫と決めまして、山と山の間の谷になる所は大人と子供の間という思春期の半端な時代は、一段点数が不安定だとして、前後より弱い点数になるわけです。

おなじく、此の世と彼の世の中間の天極星も、前の星と、後の星よりも、一段低い点数に決められました。このような考え方に基づいて、十二大従星の序列が決まったのです。

この点数は一つの日安と考えておいてください。

点数をつかって、さまざまな占いをする技法が出てきますが、数学的な点数のとらえ方ではないのです。

つまり、天馳星は①点、天将星は⑫点なので、天将星のほうが、12倍チカラが強いと思いがやすいですが、天馳星よりも12倍強いという意味ではないのです。

天極星は②点で、天胡星は④点だから、天胡星は天極星の倍強いのかと、これは倍強いことではないのです。

人体図に載っている『十二大従星』がもつエネルギー指数を見ていくわけです。

①～⑫までの指数は、あくまでも強弱をあらわしている目安なのです。

ゆえに、ぴったり数学的に数字上で計算してということではないのです。

そのように解釈して頂きたいのです。

続いて【エネルギー論】に入ります。



## □ エネルギー論

十二大従星を『身強』『身中』『身弱』に分けました。

人体図を見たときに、身強か、身中か、身弱かに分類しないといけないのです。

実際の占いは『身強』『身中』『身弱』のほうが重要です。

このことは基本中の基本だと思ってください。

### 身強・身弱・身中

参考資料 (1)

強星〔天将星〕〔天禄星〕(天南星)

弱星〔天報星〕〔天胡星〕〔天極星〕〔天馳星〕

中星〔天貴星〕〔天恍星〕〔天堂星〕〔天印星〕〔天庫星〕

身強— 人体図に強星を1星、または1星以上所有するもの

身弱— 人体図に弱星を多く所有しているもの

身中— 人体図に中星を多く所有しているもの

エネルギー論には「均<sup>きん</sup>エネルギー」という言葉が出てきますけど、身強・身中・身弱のほうが重要であり、その補佐として均エネルギーをつかいます。

### 補佐として“均エネルギー”をつかう

『身強』といっても、とても強い身強の人のいれば、身中に近い身強までさまざまです。

『身中』といっても、身強に近い身中の人もいれば、身弱に近い身中の人もいるわけです。

そうしますと、その『身中』がどの程度の身中なのかを判断する基準が必要になります。

そのときには、平均エネルギーの数字を出して判断します。

☞ 均エネルギーとは、平均エネルギーのことです。

そのような観方をすると思ってください。

☞ 1つ作ります。

〔たとえば〕人体図に、天南星・天堂星・天馳星という星が載っていたら、各星の点数を出します。

天南星は⑩点、天堂星は⑧点、天馳星が①点なので、この数字を書き込みます。

宿命 (1)
--------

		天南 ⑩
天馳 ①		天堂 ⑧

その人のもっている3つの数字を全部加算して、3で割ると、平均のエネルギーがでるはずです。

$$10 + 8 + 1 = 19$$

この3つの点数を足すと、19点になります。

$$19 \div 3 = \underline{6}, 333\dots$$

均エネルギー

この合計点を3で割ると平均エネルギーがでます。

19 を 3 で割ると、6,3333…で割りきれません。

割りきれなくても、問題はありません。

6,3333…になっていたら、この(6,33)の数字が、この人の平均エネルギーです。

点数は1点から12点までありますから、6,33 というのは、平均の点数としては、丁度、真ん中くらいです。

そうしますと、この人は天南星があるから身強です。身強ですが、均エネルギーは(6,33)しかないから、どちらかといえば、身中に近いほうの身強です。

〔身強のなかではかなり弱いほうです〕となるのです。実際の占いでは……身強のなかではかなり弱いほうの身強だと判断するわけです。

目安として、均エネルギーを分類して見ていくのです。

そうしますと、均エネルギーが何点になるかです。

その判断基準として、ABC という3つのグループに大きく分けます。 ➡

A (1 ~ 4)

B (4 ~ 9)

C (9 ~ 12)

このABCでは(Aが1点から4点)(Bが4点から9点)となっていていますが、均エネルギーが9点ちょうどの場合は、Bに入れてください。

均エネルギーが9点丁度の方は、真ん中のBに入れてください。9点はBです。

合計点を3で割ったときに、[例えば] 9,33 となればCに入れてください。

そこで、AとB区切ってください。

9点丁度はBです。

そして、9, 幾つとなっていたらCに入れます。

BとAの境もおなじように考えてください。

Bが4~9、Aが1~4になっていますが、4点丁度はAに入れます。4点丁度の方はAに入れてください。

4, 幾つ、チョットでも半端が出たら、Bに入れます。

⇒ Cグループの説明をします。

Cは（9～12）となっていますが、Cのグループに入る人は、身強・身中・身弱に分けても、必ず身強になるはずですが。

Cグループは、最もエネルギーが強いグループなわけです。

C（9～12）最もエネルギーが強い

Cは必ず身強になりますが、身強の人でも、Cに入るという人は、それほど多くないはずですが。

身強の人でも、点数出してみると、Bに入る人は結構多いのです。

そこで、つぎのように考えてください。

C（9～12）最もエネルギーが強い

（身強のなかでも特に強い人）

身強のなかでも特に強い人です。と考えてください。

Cグループの人は、エネルギーがすごく強いと思ってよいわけです。

すごく強いというのは ⇒ 運勢が強いという意味ではないですよ。

運勢とは別な話です。間違えないでください。

エネルギーがすごく強い人は、たくさんのエネルギーを与えられたわけですから、たくさんのエネルギーをつかう役目がある。ということです。

**たくさんのエネルギーをつかう役目がある**

身強のなかでも、特に強い人ですから、ほかの人よりもたくさんの物事ができるはずです。

**他人<sup>ひと</sup>よりも沢山の事ができる**

他人<sup>ひと</sup>よりも沢山の事ができる宿命であり、それをするのが役目です。

そういう宿命なので、器の大きい宿命だと考えてよいのです。

**器の大きい宿命**

宿命どおりに生きなくてはいけないという考え方から

すると……器が大きいのですから、普通の生き方をしていたのでは、この器の大きさを活かすことはできません。

そして、エネルギーが強すぎるために人生の目的も定まりにくいと傾向があります。

**器が大きい宿命なので**



**普通の生き方では器を生かせない**

このCグループ<sup>o</sup>はエネルギー強過ぎて、本人が満足する生き方を見つけにくいといえますし、見つけるのにかなりの時間を必要とします。

一般的にこのような姿だと思ってよいのです。

〔たとえば〕女性ということでは、Cグループに入る女の子が普通のOLになっても、とてもこの器の大きさを生かしたことにはならないのです。

つかい切れないほどのエネルギーをもっているのに、通常のOLでは、エネルギーが余ってしまいます。

Cグループではなくて、一般的な宿命の人なら、結婚



して普通の主婦になっても、宿命どおりの生き方ともいえるでしょう。

ところが、Cグループの女性はとても器が大きいので、普通の主婦やOLになっても、器の大きさを活かしていないために、どうしても本人自身が満足できないわけです。

Cグループに入る宿命の人は、車に例えれば、大型の貨物トラックなのです。

大型貨物トラックなのに、小さな荷物1個だけ載せて走ったら、どうなりますか……採算が取れません。

走れば走るほど赤字ですよね。

大型貨物トラックを走らせるのであれば、沢山の荷物を積んで走らせなければ、割りが合わないはずですよ。

その意味で、Cグループに入る人というのは、男性でも女性でも、実は一番大変なのです。

「一番たくさんのお仕事をやりなさい」というわけですから、一番大きな役目を与えられたともいえますし、その器に合った生き方を見つけるために、無駄な時間

を消費してしまうことになりやすいわけです。

それゆえに、エネルギーを消費して大きな物事を達成したときは、充実した人生になります。

過大なエネルギーを消化できたときには、

他人<sup>ひと</sup>よりも充実した人生となる。

算命学は『消化<sup>しょうか</sup>』という言葉<sup>たびたび</sup>を度々つかいます。

エネルギーの消化が出来たときは、他人<sup>ひと</sup>よりも充実した人生になります。ということですね。

ここでのエネルギーの意味については、その人の進むべき分野については語っていません。

そうしますと、のような分野でエネルギー消費すればよいのか……それは「十大主星」で観るのです。

分野ということでは〔商売に向いている〕とか、この人は〔学者に向いている〕とか、そういう意味です。

そこで……Cのグループに入る人は、それがどの分野であろうとも、その分野のなかで、とにかく他人<sup>ひと</sup>より

も、どんどんエネルギーをつかう生き方をするのは、宿命どおりであり、宿命が生き生きしてきます。

ここで誤解しやすいのは——Cに入る人物はもともと体力があり、体が大きくて、丈夫だとか……それらのことは決まっています。

そういうことは一切、なにも決まっていないのです。もしかすると、Cに入る人物でも、生れつき体が弱いかも知れないのです。

たとえ……生れつき体があまり丈夫ではないにしても、何とか努力して、人より沢山の事柄が出来る人間にならなくてはいけないのです。

体が弱ければ、人一倍ひといちばい働くのは大変です。

相当に苦勞しないとイケないはずですよ。

大変ですけど、その苦勞を乗り越えて行くと、他人ひとより充実した人生が待っていますよ。ということです。

その人が目指す分野、それは何の分野なのかわかりませんが、もし、その分野で体力が必要であれば、体力も養わないとイケないのです。

Cに属する人の場合は、通常は人生の後半にならないと、本当に自分が納得できる生き方には到達できないと思ってよいのです。

Cの人は運勢が悪いから、「人生の後半にならないと、本当に自分が納得できる生き方には到達できない」ということではないのです。

普通の人ができること（仕事）であっても、この人は満足できないという意味です。

「これから成し遂げようとしていることは、常識では考えられないほど難しいことなのよ……」と、まわりから言われたり、思われたりするような生き方のほうが宿命は生きてきます。

そうすることで、本人も満足するし、そのほうが運勢も伸びて行くのです。

☞ つぎは…… Bグループの平均エネルギーをもつ人の説明に入ります。

⇒ Bグループの説明をします。

Bグループは、平均エネルギー（4点～9点までの人）です。  
9点いくつという端数は出たら、それはAグループに属します。 よろしいですね……。

Bグループのエネルギーの量というのは、社会で活躍するのに適しているエネルギーと考えてください。

（4点から9点まで）の平均エネルギーをもつ人は、社会で最も活躍しやすいエネルギーを備えています。

言い換えれば、Bグループに属する人は〔肉体とエネルギーのバランスが最も良く調和されている人〕ということになります。

Bグループの人は……Cグループに属する人のように、大量のエネルギーを消化する生活をしなくて済みます。その意味で、世の中で活躍するのに適したエネルギー量を備えていますから、社会で活躍しやすいといえるのです。

Cグループの人は、エネルギーの器が大きいわけですから、その分だけ、人よりも多量のエネルギーを消費しなければならないと考えています。

世の中には、並外れたからだの大きな人も存在しますが、ふつう、人間としてのからだの大きさは限られています。それなのに、エネルギー量だけが、人の2倍、3倍とあるわけですから、それを消化するためには、大変な肉体的苦勞を伴うことになります。

もし、その人が病弱でなくてもエネルギーを消費するのは大変なのに、生来、からだが弱ければ、それこそ消化するのは大変なことです。

◆ 政治家・小沢一郎さんは、からだが弱いことで知られています。彼は最身強です。彼の場合、病気でエネルギーを消化していると考えることができます。この話には、<sup>しゅごしん</sup>守護神と<sup>いみ</sup>忌<sup>がみ</sup>神という話の関係してきますので、これ以上の説明は<sup>はぶ</sup>省きませんが、エネルギーを消化するという意味では、病気で消化することも1つの方法なのです。幼少期

これは幼少期の子供にも当て嵌まることですが、ここでは省きます。 話は戻ります—— ➡

Bグループの人は、Aグループの人のように、それほど肉体を酷使しなくても、人の何倍も働かなくても、消費できる範囲のエネルギーです。

Bグループの人は、普通の社会生活をするのに、最適なエネルギーの量を与えられているということです。

Bは最適なエネルギー量をもつから——成功しやすいのでは……と思われるようですが、その話は別です。

Bグループの人は、エネルギーの量が最適ですから、精神と肉体のバランスがピッタリと組み合わせるし、組み合わせやすいといえます。

「精神と肉体の釣り合いを、ピッタリと組み合わせやすい」というのは、人間が生きていくうえで最も適しています。生活のために仕事をするにも適しています。

人間が生存して、活動するのに適したエネルギー量ですから、精神と肉体のバランスが取れていて、無理がなく生きやすい、生活を<sup>いとな</sup>営みやすいと考えています。人一倍に苦勞しなくても、人一倍肉体を酷使しなくて

もよいのです。Bグループに属する人が最も多いのです。

⇒ つぎに——Bグループを、2つのグループに分けなく  
てはいけません。

Bグループを2つに分けなくとはいけないとは、どう  
いうことかといえ、このBグループに限って……

**B 1 グループ** と **B 2 グループ** に分けます。

これはBグループに限ってです。

**B 1 グループ** は、平均エネルギー量が（4点～7点）  
の人です。

**B 2 グループ** は、平均エネルギー量が（7点～9点）  
の人です。

Bグループ全体としては、社会生活に適したエネルギー  
を備えています。といったわけです。

しかし、Bのなかでも、エネルギー量の少ない人は、

**B 1 グループ** の（4点～7点）に属します。

その意味で、**B 1 グループ** の人は、社会生活のなかで  
比較的エネルギーを必要としない分野に向きます。



⇒ B 1 グループ（4点～7点）の人は、エネルギーが少ないわけですから、それに見合った分野ということになります。

会社を〔例〕にあげれば、営業よりも事務職向きといえます。

営業ということでは、外回りよりも、会社とかに足を運んでくれた取引先との営業に当たる部門に適しているわけです。

あるいは、工場や道路などの作業現場では、実際に肉体をつかう作業よりも、現場管理職とか、あるいは、技術を駆使する分野のほうが良いわけです。

〔たとえば〕立ち作業は、かなりのエネルギーを消費します。その場合は、技術を磨くなりして、指導的な立場になれば、自分のエネルギー量に見合った仕事ができるわけです。

さまざまな仕事のなかで、自分のエネルギーを調節できる仕事を考えるわけです。

その意味では、自由業でもいいでしょうし、学術分野、研究関連なども適している分野と考えられます。

⇒ **B 2 グループ** は（7 点～9 点）のエネルギーの量をもつ人です。エネルギーの量が多いほうに属します。営業でも積極的な動きを必要とする外回りもできます。工場なら実際的な生産現場、作業現場なら肉体をつかう作業でもよいのです。総務でも、肉体的エネルギーを消化できるような部署が適しているといえます。調理などの長時間の立ち作業も大丈夫です。

⇒ 具体的に占うときには、B グループに属する人が、どの分野に向いているのか、どのような仕事に適しているのかということは、「十大主星」によって異なります。

それは人体図全体を観て判断することになります。相対的にですが、エネルギーを消化するという意味でいえば……〔たとえば〕あまり動かないデスクワークの場合は、適度に運動をして、エネルギーを消化するというような方法を取るとよいでしょう。ですから、仕事の内容、あるいは生活習慣を考慮して決めると良いわけでありませう。

⇒ 最後に A グループです。

A グループは（1 点～4 点）のエネルギー量に属する人です。このグループの人は、最もエネルギーの量の少ない人です。

A グループの平均エネルギー量は（1 点～4 点）ですから、最もエネルギーの量の少ない人のグループです。

人間が生きるための、社会活動や仕事などを手際よくこなすには、少ない量ともいえるのです。

その意味では、現実面（時間・肉体的）で忙しい職場や環境だと無理をすることになるかも知れません。

しかし、身弱の勉強でやりましたが……身弱は精神性に強いと習いました。

それゆえに、A グループの人は精神面に強い人です。算命学は、強いものを鍛えるのが基本です。

A グループの人は、精神面で人一倍の苦勞をしないと、その適性を発揮することが難しくなります。

つまり〔現実面の苦勞が少ない世界〕とか〔時間的に追いまくられるように忙しい〕とか〔お金を儲けるために肉体を

つかってあくせく働く」といった環境には向きません。  
ということは、精神的苦勞が多い世界であれば、その良さを最大限に伸ばすことができます。  
精神的に多大な苦勞をすることが、本来の才能を引きだして、世の中での成功へとつながっていきます。

エネルギー量としては、学者や研究者向きといえます。  
精神的分野、理性的分野などはよいでしょう。  
物事を感じとらえる感性の世界、それによって得られた素材を整理・統一する企画や立案などの精神機能を駆使する分野に適しています。  
知性的に物事の本質をとらえる能力をつかう研究開発部門とかは当て嵌まるでしょう。

【初年】 5 2 回目 【十二大従星指数】 01^16

【エネルギー論】 17^36 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】 5 3 回目 【大運法】